がん社会を診る

中川　恵一

イラスト・中村　久美

家族歴あればリスク高く

実の親や兄弟に1人以上がんになった「がん家族歴」を持つ人にがんが多いことが、国立がん研究センターなどの研究グループの調査研究の結果、明らかになりました。

研究グループは全国10地域の40～69歳のがん経験のない10万人以上を追跡しました。アンケート調査の回答に基づき対象者全体を、がん家族歴の有無で2つのグループに分け、がん全体の罹患（りかん）リスク、部位ごとのがん罹患リスクを比較しました。

がんの罹患に関連する年齢、性別、地域、肥満度、喫煙、飲酒、身体活動、糖尿病歴などを調整した上で、分析が行われました。

がんの家族歴がないグループに比べて、あるグループでは、がん全体で11％、リスクが高まっていました。臓器別にみると、食道がんや膵臓（すいぞう）で、家族歴ありのグループは2倍以上の発症リスクを示しました。さらに、膀胱（ぼうこう）がんでは、なんと6倍を上回る高いリスクとなりました。

がんの家族歴というと、「がん家系」という言葉を思い出します。家族歴がある人に発がんリスクが高まる理由として、遺伝的側面があるのは確かです。実際、北欧での大規模調査の結果でも、同一の遺伝的情報を持つ一卵性双生児では、同じ臓器のがんを発症する確率が4割近くにも達していました。

しかし、発がん原因のうち、遺伝的要因は5％程度にすぎません。同じ生活環境を共有することによる面も強く関係していると思います。

たとえば、私も罹患した膀胱がんでは、家族歴がある人のリスクは6倍以上でしたが、遺伝的要因が強いがんは、大腸がん、乳がん、卵巣がんなどで、遺伝性の膀胱がんはあまり知られていません。

一方、膀胱がんはヒ素を多く含む水を飲んでいる地域に多いことが分かっています。今回の研究結果は、家族が同じ飲み水を共有していたことが理由の一つだった可能性もあると思います。

35年以上の私の臨床経験でも、仲のよいご夫婦が同じがんを罹患する例が何組もありました。

いずれにせよ、がんの家族歴がある人は、がんを予防する生活習慣を心掛け、がん検診をきちんと受けておくことをお勧めします。

（東京大学病院准教授）